

## 令和2年度 校内研究計画

### (1) 研究テーマ

「将来につながる学びができる子どもを育む中学校教育の創造」

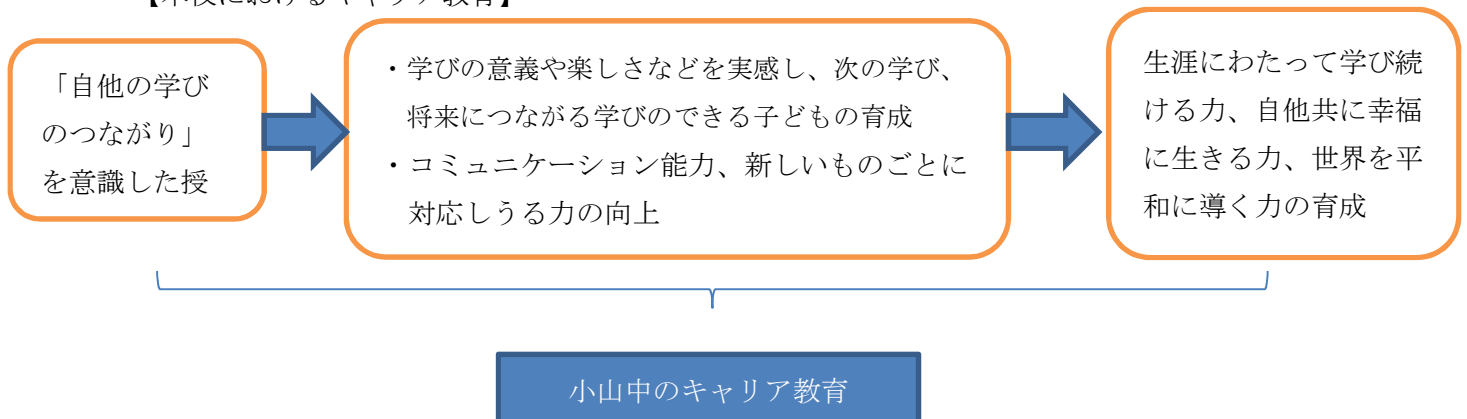
～主体的・対話的で深い学びの追究～

### (2) テーマ設定の理由

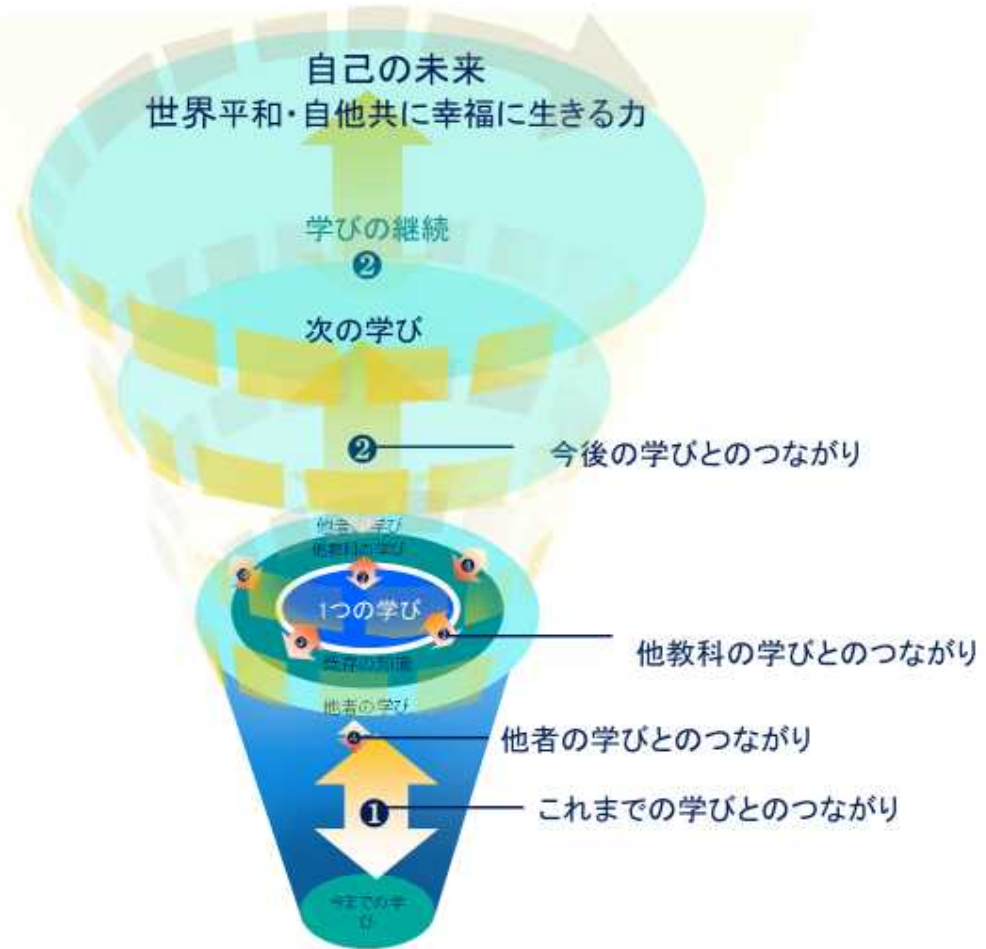
これからの時代において、学習指導要領の視点は、子どもたちが「何を知っているか」だけではなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」ということであり、新しい時代に必要となる資質・能力を育成すること、すなわち①生きて働く「知識・技能」、②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」など情意・態度等に関わるものの全てを、いかに総合的に育てていくかということにある。また、日本国内における社会経済・産業的環境の国際化は教育にも大きな影響を与えている。あるいはAIの発展により、社会全体において効率性や利便性がより一層追求されている。このような状況の中でわれわれ教師は、人と人との関わりを重視した教育を展開し、共生社会におけるコミュニケーション能力や自己・他者理解のための力、新しいものを生みだし、学び、対応しうる力を育成することが求められている。

これらのことをふまえると、社会人として自立した人を育てるための「キャリア教育」という視点は、中学校教育において不可欠な要素である。「キャリア教育」という言葉には様々な要素が含まれる。それらは単に、進学や仕事に直結させるような教育ということだけを意味するわけではない。自分らしい生き方を見つけること、生涯学習への意欲の向上、自分や自分の役割の価値を実感すること、などが挙げられる。また相模原市のキャリア教育は、「つながる力」「乗り越える力」「自律する力」「見通す力」の4つを育成することが目的であることが明示されている。本校の研究においては「キャリア教育」の視点に立った深い学びを実現する上で、「自他の学びのつながり」を重要視する。「つながり」とは①自分のこれまでの学びとのつながり、②他の教科の学びとのつながり、③今後の学びとのつながり、④他者の学びとのつながり、の4つのつながりを意味する。これらのような「学びのつながり」を意識し、主体的・対話的な学びを通して、学習意欲（学びに向かう人間性）を向上させることのできる授業、つまり今学んでいることの意義や楽しさ、必要性を感じ、今の学びが次の学び、将来に役立つことを実感させることのできる教育を目指すことを本研究の目的とする。そしてこのことは、生涯にわたって学び続ける力、自他共に幸福に生きていく力、さらには世界を平和に導く力の育成につながり、それこそが本校の「キャリア教育」とであると定義づけた。

#### 【本校におけるキャリア教育】



【「自他の学びのつながり」のイメージ】



このテーマ設定を受け、教師一人一人が子どもたちの発達の段階や発達の特性、子どもの学習スタイルの多様性や教育的ニーズと教科等の学習内容、単元の構成や学習の場面等に応じた方法について研究を重ね、ふさわしい方法を選択しながら、工夫して実践できるような研究を推進していきたい。また、研究仮説を以下の通りとした。

**研究仮説**  
授業において、自他の学びのつながりを意識した授業実践が行われれば、生徒は学びの意義や楽しさを実感し、次の学び、将来につながる深い学びのできる自立的学習者へと成長するであろう。

近年では「SDG s（持続可能な開発目標）」という言葉が頻繁に使われている。この言葉においては17の目標が設定されているが、その4番目は「質の高い教育をみんなに」である。このことから、われわれ教師が授業改善に努め、授業の質を向上させること自体が世界平和に貢献することになると言えるのである。

(3) 研究の具体的な取り組み

本校では平成28年度から30年度にかけて、「主体的・協働的な学びを育む、授業研究」と「たくましく生きる生徒の育成を図る、グループ研究」の2本立てとし、3年間を通じた継続研究として実施した。生徒の視点からの学び方と、教師の視点から授業のユニバーサルデザインを取り入れ、小山中のスタンダード作りに努めた。その際に、深い学びにつながるように、シンキングツールや協働学習、ICT活用、生徒と共に作る評価、などの実践を効果的に取り入れた。

平成31年度より新たに「キャリア教育」という視点を加え、授業改善のための新たな三年間の継続

研究として研究を実施している。今年度はその2年目にあたり、研究の軌道修正とさらなる追究の年度である。4つの学びのつながりのうちの①自分のこれまでの学びとのつながりに関しては、「小中一貫教育」を意識し、小学校での学びとのつながりも重視する。そのことにより9年間の学びを見据えた教育課程編成の方法についても知見を深める。

令和2年度は生徒の健康を保ち感染症の蔓延を防止するために、生徒・教職員ともにソーシャルディスタンスを確保したうえで、いかに質の高い学びを保障するかを追究することが新たな挑戦となる。これまで当たり前のように授業で行ってきたこと、グループ学習や生徒同士の意見交換、近距離での個別指導などの方法を根本的に変えて新たな指導方法を模索していくことが必要である。課題の提示方法、離れていても学びが深まる課題内容、紙面やICT機器等を生徒同士の学びの成果の共有方法、などを実践的に研究していくこともわれわれの使命となるであろう。

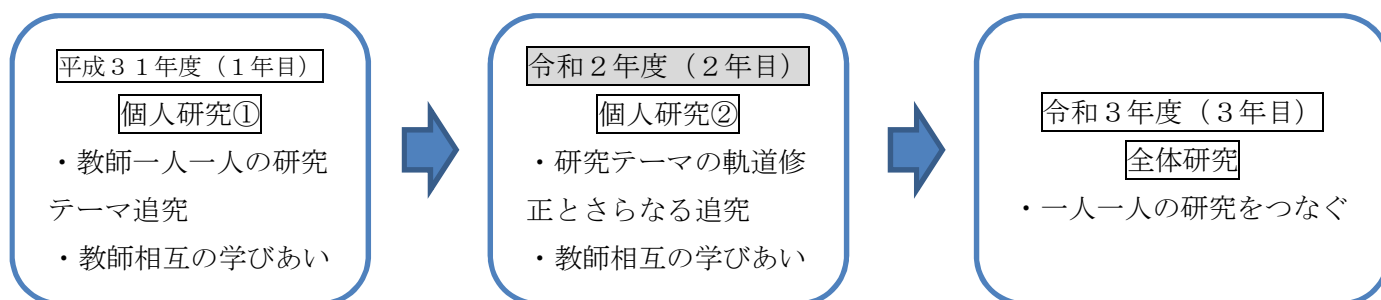
### ①研究体制について

教師一人一人のニーズに合わせ、個人研究テーマを設定して追究していくこととする。このことによりこれまでの研究の中で学んだことをさらに追究し、授業力の向上を目指す。個人研究テーマは、「学びのつながり」を基盤とした「キャリア教育」という視点を踏まえたうえで設定する。これまでの研究の成果から、研究仮説を立証するための手段としては、次のようなものが考えられる。

- ・協働学習
  - ・シンキングツール
  - ・ICT活用
  - ・生徒と共に作る評価
  - ・評価をつなげる
  - ・学びのバリアフリー
  - ・教科横断
  - ・課題提示方法、課題内容の追究
  - ・学びの成果の共有方法
- 昨年度の研究の成果と課題を踏まえて、個人研究テーマを変えたりすることも考えられる。

### ②個人研究の方法について

年度初めには教師一人一人が「研究計画書」を作成する。研究を進めていく上でその内容や経過を随時記入していき、校内研究全体会、教科部会、研修会等で共有する場を設けて教師同士で共有する。年度末には研究の成果と課題を記入する。



### ③指導演について

普段、年3回の公開校内研究の時ともに相模原版指導演の略案バージョンを活用し（個人情報保護のため）、ICT活用場面や対話的な学習の場面、シンキングツール等の活用を明記することで、どのようなねらいをもって意図的に活動を組み込んだか分かるようにしておく。

### ④授業研究の活動単位について

個人研究テーマに基づいて研究グループを作り、多角的な視点で情報交換ができる方法をとって授業研究を行うこととする。1年間を通してそれぞれのチームで研究したことをレポートや冊子、あるいはワークショップ形式の発表等のかたちにしてまとめ、全体会で共有する。

### ⑤研究をつなげる

教師同士がカンファレンスを行い、情報交換と共有に努める。教科部会を有効に運営し、年間指導計画やシラバス、公開授業で使用する指導案などを検討する場として大いに活用する。

### (6) 校内研究組織図

- ・研究推進委員会を設け、学校長、副校長、教務主任（研究推進委員長）、研究主任、研究推進委員で構成する。
- ・教科部会を定期的に行い、互いの授業実践を共有したり、学習指導案を検討したりする中で、授業改善に努め、校内研究を推進していく。

